

## 定家十三回忌の二つの法文詩歌作品

佐 藤 恒 雄

### 一

『二十八品并九品詩詞』をはじめで紹介されたのは赤羽学氏で、作者名の官位記載から成立は建長五年（一二五三）<sup>(1)</sup>中、成立事情は不明とされた。それを承けた拙論第一稿<sup>(2)</sup>において、『続古今和歌集』一四二六・前参議忠定歌の詞書き「定家卿十三年に、前大納言為家、一品経歌とて人々にすすめ待りけるついでに、秋懷旧といふことを」があることを指摘し、建長五年定家十三回忌に為家が勧進して成った作品であるとした。それに対し安井久善氏は、前年建長四年に薨じた九条道家の追善供養会のものであったかもしれないとの説を示され、若干補訂して『藤原光俊の研究』<sup>(3)</sup>の一部に加えられた。安井説への反論として、拙論第二稿<sup>(4)</sup>では、その可能性が皆無であることを説き、やはり為家・為氏父子を中心とする御子左家関係の催しで、「定家十三回

忌法華經二十八品并九品詩歌」であると結論した。その後、赤羽学氏が再度問題点を整理され、池田家文庫本の親本にあたる慶應義塾大学斯道文庫本と島原市図書館蔵本の二本の所在情報を加え、『岡山大学国文学研究資料叢書三』に収め、詳細な解説と注解を付して刊行された。<sup>(5)</sup>

### 二

以上の研究史を踏まえ、その後に見出しえた二三の事実を加えて、いま改めてこの作品に関し整理してみると、私の論証には大きな錯誤があったことに思い至る。すなわち、定家十三回忌の為家勧進法文和歌作品は一つしかないはずだとの暗黙の前提に立ち、『二十八品并九品詩詞』と『一品経歌』という性格も内容も異なるはずの二つの作品を短絡してきたのであったが、両者は別々に並存した作品で、ともに定家十三回忌を期した法文詩歌作品であり、またとも

に為家の勸進により成立した作品であると、峻別して考えなければならぬ。

すなわち、完存している『二十八品并九品詩調』は、詠作者の官位記載から、建長五年正月十三日から翌六年正月十三日の間、おそらくは建長五年中に成立した作品である<sup>(8)</sup>。定家十三回忌にあたる八月二十日はその期間内にあるから、定家十三回忌に付随する法文詩歌であつたことは疑いないところである（十一月四日は為家母の八回忌、十一月三十日は俊成の五十回忌であつたが、ともに関係はないであろう）。そこまで留めて「一品経歌」の厳密な意味内容の吟味をこそ優先すべきであつたのに、それ以上の確実さを求めて、定家十三回忌にちなむ作品であることを示唆する証拠として、『統古今和歌集』巻第十六哀傷歌の、

定家卿十三年に、前大納言為家、一品経歌として  
人々にすすめ待ちけるついでに、秋懷旧といふこ  
とを 前参議忠定

むかしわがつらねしそではくちはててなみだにのこる  
秋のよの月 （統古今和歌集・一四二二八）

があることを第一稿で指摘した。そして、忠定が『二十八

品并九品詩調』の作者に名を連ねていないこと、「一品経歌」とあつて『二十八品并九品詩調』とはないとの重大かつ本質的な不審に対し、「為家の勸進が法文歌の実作を依頼する人たちと、その他に懷旧歌のみを依頼する人たちと二種類あつたと考えれば、異とするに当たらない」とか、「ただ忠定は『二十八品并九品詩調』の作者としてではなく、それに付随する『秋懷旧』歌のみの提出を求められたのである」とか、法文歌の慣例や故実を無視した苦しい理由を構えて、両者を強引に結びつけ、第二稿の再説においてもそのままに踏襲してきたのであつた。

しかしその後、忠定の一首のみならず、別に以下の二首が存在することを知った。

前中納言定家十三年の法事に一品経すすめ待ちける  
次でに、秋懷旧といふことをよみてつかはしけ  
る 常磐井入道太政大臣

あとしのぶときさへ秋のゆふぐれをいかにとどめしか  
たみなるらん （新千載和歌集・二二二六五）

前中納言「」かくれはべりて十三年の二品経歌

に、人々歌つかはしける時、おなじ品（序品）の  
心を

いにしへにおもひあはするひかりかなそなたをてらす  
やまのはの月  
（閑月和歌集・四八八）

後者の「二品経歌」は、用語そのものがないから「一品経歌」の誤りとして問題ないが、「前中納言」とのみあつて実名部分が欠字になっている点で、いささかの不審は残るけれども、ほぼまちがひなく「定家」と推断される。これら二首によれば、為家勸進『一品経歌』において、実氏は「序品」の心と「懷旧歌」を詠んだのであった。「一品経歌」とは、二十八品もしくはその上にプラス二経（開経「無量義経」と結経「普賢経（仏説観普賢菩薩行法経）」のうちの一品（一経）のみを分担してその心を詠み、「懷旧歌」を副えて応えるのが通例であつたから、まさしくこれらは定家十三回忌の『一品経歌』であつたことになる。実氏の場合に準じて、忠定もまた何らか一品の心を分担して詠み、それに前記「懷旧歌」が副えられていたにちがいないのである。そして忠定と同じく実氏もまた、『二十八品并九品詩調』の作者ではなかつた。

とすれば、定家十三回忌を期して為家が勸進した法文詩

歌作品は、『二十八品并九品詩調』のほかに、いま一つ『一品経歌』もあつたということに他ならない。為家の自撰家集『為家卿集』（家集Ⅱ）には、建長五年詠はわずかに九首を収めるのみで、二つの作品からは一首も採録されていない。しかし、『二十八品并九品詩調』の場合と同じように、『二品経歌』の方も各品（経）の内容を詠じた歌と懷旧歌が一組になつた作品が、ほぼ確実に存在し、後述するとおり、為家の「嚴王品」詠もその中に含まれていたにちがいない。

### 三

『二十八品并九品詩調』の作者と品（経）別配当等は、以下のとおりである（作者名下の括弧内は年齢）。

#### 儒者（\*—非成素）

（二十八品）

（九品）

前権中納言藤原経光（四一）

無量義経・方便品・湧出品・

上品中生

式部大輔藤原経範（六五）

序品・人記品・随喜功德品

上品上生

式部権大輔菅原公良（五九）

譬喻品・勸持品・勸発品・

中品上生

菅原良頼（六〇）

信解品・陀羅尼品・

\*入道大納言寂成（四余隆衡）（八二）

藥草喻品・藥王品・

從三位高辻長成（四九）

授記品・五百弟子品・神力品・

下品上生

\*淨空（入道季房 隆衡弟）？

化城喻品・寿量品・属累品・

上品下生

日野光国？

法師品・不輕品・

中品下生

藤原俊国？

宝塔品・法師功德品・

下品下生

菅原在章（四九）

提婆品・嚴王品・

藤原茂範（二八）

\*源雅具（七〇）

## 歌人

前内大臣藤原家良（六二）

民部卿藤原為家（五六）

右衛門督藤原為氏（三三）

入道三品連性（藤原知家）（七二）

如舜（入道源具親）？

入道三位寂能（世尊寺行能）（七四）

真親（葉室光俊）（五一）

寂西（藤原信美）（七七）

九条行家（三一）

祝部成茂宿禰（七四）

土御門院小宰相（家隆女）？

藤原隆祐（家隆息）？

入道前大納言綠空（藤原基良）（六七）

安樂行品・妙音品・普賢經  
分別功德品・普門品・

下品中生  
中品中生

無量義經・勸發品・

序品・勸持品

方便品・分別功德品・嚴王品

譬喻品・人記品・屬累品・

信解品・普門品・

藥草喻品・湧出品・神力品・

授記品・壽量品・妙音品・

化城喻品・五百弟子品・隨喜功德品

法師品・法師功德品・

寶塔品・陀羅尼品・

提婆品・藥王品・

安樂行品・不輕品・

普賢經・

中品下生  
上品中生

まった。

特に歌人について見れば、これでは定家ゆかりの人々を網羅することは到底できない。中山忠定（六六歳）・西園寺実氏（六〇）のみでなく、宇都宮頼綱入道連生（七六）もまだ健在であったし、西園寺公相（三二）・山階実雄（三七）・二条資季（四七）・二条良実（三八）・一条実経（三一）・飛鳥井教定・花山院師繼（三三）・藤原成実（六三）・源家清（四三）・法性寺為繼・四条隆親（五二）・後鳥羽院下野・藻壁門院少将・藻壁門院但馬・少将内侍・弁内侍と指を折ってゆくと、二十八人（あるいは三十人）はすぐにも満たされよう。為家の勧進は、あるいは藤原長綱などに及んでいたかもしれない。『二十八品并九品詩譚』の作者からは外されていた九条基家（五二）も、この『一品経歌』の人数には入っていたであろう。御子左家には為教（二七）がいるし、為家と為氏は重なるけれども『一品経歌』にも名を連ね、俊成十三回忌の定家の例にもならって、主催者として必ずや為家が嚴王品を詠んでいたであろう。また、俊成・定家の跡を襲って、この『一品経歌』の方を十三回忌における法文歌の正統とする意識もあるいは強かったかもしれない。

儒者は勘解小路経光以下十二人、歌人は衣笠家良以下十三人、合計二十五人で、一人二首ないし四首の詩歌の詠進を勧進したことがわかる。そして、和歌のみでなく「詩歌」の催しとしたところに、漢詩をもよくした定家の追善に相應しい、為家の周到な配慮を窺うことができる。一人が複数品（生）を詠んでいるので、この作品自体は「一品経歌」ではない（両者を結びつけてきたことの不当さは明白である）。これらの作者は、定家に最も近しかった人々であって、複数首を割り当てたため、人数は極く少数に限られてし

一方『二十八品并九品詩譚』では、序品と勸持品と上品

上生歌を為家が詠み、嫡孫為氏に方便品・分別功德品・嚴王品が割り当てられている。すでに險惡な間柄になっていた真觀や蓮性らにも呼びかけて、等しく定家の門弟として参加せしめている点で、為家勸進の説得が力あったことは動かし難く、いわば定家後の歌壇ならびに詩壇を挙げたの追善作品にふさわしい法文詩歌となつたのであつた。一品経歌では主催者が詠むべき「嚴王品」を為氏が詠んでいることの意味は、御子左家の嫡男為氏を準主催者として世に示し、二つの品経詩歌が重複しないように、父子二人の役割をすみ分けた為家の深慮に基づいていたであらう。

#### 注

- (1) 赤羽学「岡山大学所蔵『二十八品并九品詩調』」(『国文学言語と文芸』第五十六号、昭和四十三年一月)。
- (2) 佐藤恒雄「定家十三回忌一品経歌」(『和歌史研究会会報』第三十四号、昭和四十四年八月)。
- (3) 安井久善「『二十八品并九品詩調』の成立について」(『和歌史研究会会報』第四十八号、昭和四十七年十二月)。
- (4) 安井久善「藤原光俊の研究」(笠間書院、昭和四十八年十一月)。
- (5) 佐藤恒雄「二十八品并九品詩調再説」(『和歌史研究会会報』第五十六号、昭和五十年六月)。

(6) 赤羽学「『二十八品并九品詩調』についての諸問題」(『岡大文論稿』第二号、昭和四十九年三月)。

(7) 赤羽学編著「『二十八品并九品詩調 現存卅六人詩歌屏風詩歌』(岡山大学国文学研究資料叢書三)(福武書店、昭和五十年八月)。

(8) 注1赤羽論文。菅原(高辻)長成の叙従三位が建長五年正月十三日、源雅具の辞権中納言が建長六年正月十三日で、その間。

(9) 『釈教歌詠全集 第三卷』(東方出版、昭和九年七月。昭和五十三年九月復刊)によると、約一世紀後の作品ではあるが、貞和五年(一二四九)八月五日の藤原(二条)為世十三回忌に、早世した息男為道に代わり孫の為定が勸進した「詠法華経和歌」は、十七人の作品が残り、それによれば各品の歌と懷旧歌がセットになっている。また永享六年(一四三四)十月一日の飛鳥井宋雅七回忌品経和歌は息男雅世の勸進になる催しで、二十八人の作品が完存しているが、同じくすべてに懷旧歌が付随している。またいずれも勸進した当人が嚴王品を詠んでいる。為家以前の例として、如願法師秀能は、嘉禎二年(一二三六)中の源家長三回忌に息男家清が勸進した九品和歌の上品上生歌(九三〇)と懷旧歌(八六八)を詠んでいるから、為家の時代にも品経和歌と懷旧歌は一組のものとされていたと見てよい。

(本学教授)